

六月に於ける観測報告者は下記の如し。

観測者	略符	観測地	時間数	個数	観測者	略符	観測地	時間数	個数
小横孝二郎	Ko	和歌山縣金屋	815 _m	96	原田參太郎	Ha	大分市	325 _m	18
寺垣覺一	Te	同上	120	6	山崎幸夫	Ya	大阪府龍華	210	16
田中鐵馬	Ta	福岡縣箱崎	750	39	渡邊慶一郎	Wt	大津市	30	2
武重鑾仙	Ts	長野市	1175	99	宮原亥重子	Mi	長野市	—	2
佐藤米茂	Sa	島根縣濱田	50	2	柴田淑次	Sb	京都天文臺	—	1
小林保	Kb	長野縣柏原	120	2					

總観測時数 3595分 總観測個数 283個

観測されたる流星を各日別に記せば、

日付		六												月																	
観測者		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
Ko	—	1	4	14	—	—	5	—	9	7	—	—	0	—	—	28	—	14	7	—	—	1	—	2	—	3	1	—	—		
Ta	—	8	2	4	—	—	—	—	15	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	0	—	9	—	—	
Ts	—	—	3	4	17	1	8	17	9	2	7	—	1	3	—	9	11	1	—	—	—	2	1	—	—	1	1	—	—	1	
Ym	—	—	—	—	—	—	5	—	1	—	—	—	—	—	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
Ha	—	—	—	—	—	—	5	6	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	—	—	
其他	—	—	1 ^a	—	2 ^b	1 ^c	—	—	—	8 ^d	2 ^e	—	—	—	—	—	—	1 ^f	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	—	9	10	22	19	2	18	28	44	12	7	—	1	3	—	19	39	2	14	7	—	2	2	1	2	1	13	5	—	11	

其他の欄に於ける a 及び c は (Mi), b は (Wt), d の中 6 個は (Te), 他の 2 個は (Kb), e は (Sa), f は (Sb) の観測である。

天文同好會観測部月報

観測部流星課六月報告
課長 小横孝二郎

1. 六月中に観測されたる 0 等以上の流星は下に集録する.

No.	観測者	日付	出現時刻	確度	継続時間	光度	速度	色	其 他	出現 点		消 滅 点		流 星 群
										α	δ	α	δ	
1	(Ta)	2	0 ^h 10 ^m	5	1.2 ^s	-2	rR	W→YW	痕	320.5	+26.5	322.5	+15	蛇 遣 群
2	(Ts)	4	0 31	4	1.2	-1.2	vS	BW		236	+28	226	+46.5	
3	(Ha)	8	1 48	5	1.0	Vega	rS	BW	痕	334	+28	343	+33	
4	(Te)	9	3 13	2	0.3	-1	R	RY	痕	345	+14	348	+11.5	ペガサス α 群
5	(Sa)	10	2 51	4	0.3	0.5→-1	rR	Y→YR	痕	18	+33.5	32	+48	
6	(Ko)	〃	3 19	4	0.5	0	R	W	痕(2 ^s)	335.5	-10	334	-17	ペガサス α 群
7	〃	17	1 39	3	3.0	-2	vS	R		264	+44	305	+44.5	
8	〃	〃	2 35	3	0.5	0	R	W		298	+40	287	+40	ペガサス群
9	〃	〃	3 23	4	0.4	-2	vR	Y	痕	340	+35	332	+45	同 上
10	(Ts)	18	20 28	4	1.8	-2	vS	BW→R	痕(3 ^s)	266	+46.5	275	+33	
11	(Sb)	〃	22 42	—	3.0	-5	vS	B ^(邊へ) _{Y 色}	痕(0.3 ^s)RY	172	+87	97?	+63?	

2. 流星群の出現状況

A. 上旬のアンドロメダ γ 流星群

武重氏及び原田氏に依つて 5日→9日に、アンドロメダ γ 星附近に輻射点を有する流星群が観測された。著しいものではないが要點を記さう。

I. 出現の状況

日 付	観 測 時 間	観測者	観 測 数	γ -Andromedes	同左一時 間 平 均	備 考
5	1 ^h 45 ^m →3 ^h 45 ^m	(Ts)	17	5	2.50	快晴 雲無
7	2 45 →3 55	(Ha)	5	1	0.86	快晴 雲量= 0
8	1 30 →3 35	(〃)	6	2	0.96	快晴 雲量= 0
9	1 40→ 2 50	(〃)	3	2	1.71	晴(下) 雲量=0.5

II. 光度

観 測 者	2 nd	3 rd	4 th	4.5	5 th	合 計
(Ts)	2	1	2	—	—	5
(Ha)	1	1	—	1	2	5

III. 速度

Rapid=4 Moderate=6

IV. 色は白色である。

V. 輻射點は其欄を参照されたい。

B. スケレル β 彗星に伴ふ三角座 β 流星群

この流星群の観測については本流星課に於て早くから計畫を立て、各地方の観測者に観測を依頼して置いた。しかるに報告された結果によれば本天は月無く観測が好都合なりしにも拘はらず、ほごんご出現を見られなかつた。(Ta), (Sa), (Ts), (Ko), の観測中に β 附近より放射するものは殆んど見當らなかつた。しかるに只一人大分市の原田氏は7日の観測に於て僅かに3個だけこの附近から S 放射するものを認めてゐる。経路は短少。光度は四、五等の微光のもの、速度は稍速なる點は昨年の中村氏観測こよ

く符合してゐる。輻射点を3個の経路より近似的に求めるこ、 $R.A.=32.5^\circ$
 $Decl.=+38^\circ$ となる。兎も角この流星群の出現の寡少であつた事は争はれ
 ない事實である。

C. 武重氏観測のペルセウス β 流星群

7日及び9日の二朝に互つて武重氏はペルセウス座 β （アルゴール）附近
 に輻射点を有する一流星群を観測された。甚だ微光の流星群で、すべて四
 等以下である。色は白色、速度は甚速若しくは速、性質は上記の三角座 β
 群に類似してゐる爲、又、出現の時期が一致してゐる爲スケレルプ彗星に
 伴ふものではないかと思はれたが、計算したる軌道要素に可成甚だしい相
 違がある爲、筆者は別の流星群を考へたい。参考の爲軌道要素を併記しや
 う。

天體の種類	Apex	輻射点		Ω	ω	i	q
		R.A.	Decl.				
β -Perseid	347.90	42.55	+42°	77° 25'	65° 8'	48° 23'	0.2942
1927 K 彗星		33°	+39°	77° 13'	47° 11'	85° 6'	0.1763

D. 8日—10日 出現の牧夫座流星群

長野市の武重氏は8日夜半前2時間の観測により17個の流星を観測され
 其中十一個は $\alpha=214.5^\circ$ $\delta=+32.5^\circ$ （牧夫座）に五個は $\alpha=247^\circ$ $\delta=+16.5^\circ$
 （ヘルクレス座 γ 附近）に輻射点を有するこを報告された。猶同氏の報
 告によれば一時間に20個以上の前者に屬する流星が出現されたる由、こに
 角、甚だ豊富な流星群である。この流星群は9日小林氏、10日に武重氏に
 より各一個を観測されてゐる。筆者は昨年6月7日にこの點に輻射点を有す
 る流星群を観測したが、軌道はウインネケ彗星のそれに類似してゐた。恐
 らく本年度出現のものもウインネケ彗星に關聯する流星群ではないかと思
 はれる。速度は緩徐、色は白色又は黄白色、光度は2, 3等のもの多く可成
 り强光である。

E. 下旬のウインネケ彗星に伴ふ流星群

二三の観測者に依つて観測を企てられたが記録されたものは甚だ少數の

もので特筆すべき事はない。

F. 其他の流星群

下旬には蛇遣座 η 流星群が数個観測された。其他については輻射點の欄を御覽願ひたい。

3. 観測より誘導したる輻射點

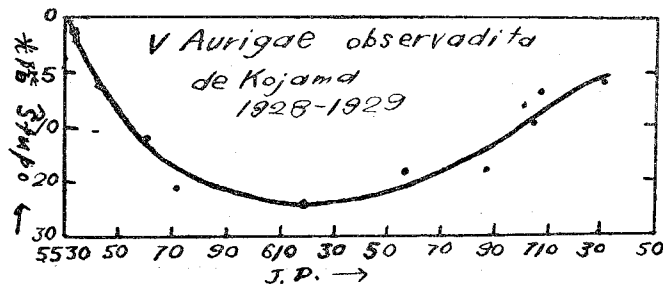
日 付	観 測 時 間 (J.C.T.)	輻 射 點		個 数	観測者	備 考
		R. A.	Decl.			
5	1h 45m $\rightarrow$ 3h 45m	347	+33	6	(Ts)	
"	" $\rightarrow$ "	6	+42	5	(")	ν -Andromedid.
7	2 0 $\rightarrow$ 3 30	42	+41.5	6	(")	β -Perseid.
"	2 45 $\rightarrow$ 3 55	32.5	+38	3	(Ha)	β -Triangulid.
"	2 45 $\rightarrow$ 3 55	9	+41	1	5 (")	ν -Andromedid.
8	1 30 $\rightarrow$ 3 35			2		
9	1 40 $\rightarrow$ 3 55			2		
8	20 20 $\rightarrow$ 23 10	214.5	+32.5	11	(Ts)	Bootid.
"	" $\rightarrow$ "	247	+16.5	5	(")	γ -Herculid.
9	2h 18m	4	+29	1	(Ta)	停止流星
"	2 0 $\rightarrow$ 3 30	43	+42	6	(Ts)	β -Perseid.
10	3 5 $\rightarrow$ 3 45	341	+16	4	(Ko)	α -Pegasisid. (不良)
16	20 30 $\rightarrow$ 21 0	217	+26.5	9	(Ts)	ϵ -Bootid.
17	1 25 $\rightarrow$ 3 40	316	+ 5	6	(Ko)	α -Equid.
"	" $\rightarrow$ "	348.5	+22	5	(")	Pegasisid.
"	2 0 $\rightarrow$ 3 30	34	+46	6	(Ts)	γ -Andromedid.
27	21 20 $\rightarrow$ 23 20	236	+34.5	4	(Ta)	γ -Corona Borealisid.

變光星觀測報告 (8)

變光星課幹事 小山 秋 雄

観 測 者	器 械
今 津 績 I. Imazu (I)	{双 眼 鏡 (4×) {25 耗 屈 折 (40×)
龜 井 壽 彦 J. Kamei (Km)	双 眼 鏡 (3.5×)

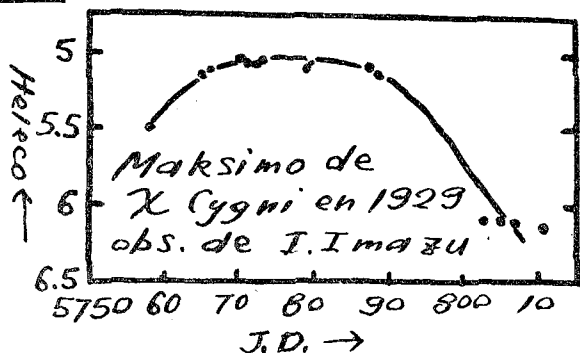
月 日 時刻	光度	備考 観測者	月 日 時刻	光度	備考 観測者
ぎよしや (Aur.) の ϵ 045443			6 1 24	6.0	I
1929			2 23	6.1	ク
7 19 3 3.9 空少し明る			3 22	6.1	ク
い I			7 22	6.1	ク
カシオペア (Cas.) の ρ 234956			9 22	6.0	ク
1929			25 21	5.8	ク
6 4 2 5.0			26 21	5.8	ク
7 19 3 5.0 Km			7 12 22	6.1	ク
I			ヒドラ (Hya) の L 103213		
かんむり (Cor.) の R 154428			1929		
5 26 23 6.0			6 2 21	5.7	不正確の 気味 Km
29 22 5.8 I			7 21	5.7	ク
ク					



ぎよしやの V の觀測 V Aur. 1928年10月 13日より1929年4月29日迄

J.D	光 階
242	
5532	1
60	11
71	15
5618	17
56	14
86	14
5700	8
04	9.5
06	7
31	6

の十個の觀測より極小時 J.D. 5613(1929年 1月 1日)でその光度 12.0 と定めた。ラキニの觀測より數日極小時が早い。ルデンドルフの光度曲線の分類によると此の星は β_{12} に屬する。即ち光度曲線は略對稱で極小は極大と同程度に尖つてゐるのである。此の圖よりも上昇が下昇より速でないらしい事はうなづける。

はくてうの γ の觀測 今津績 γ Cyg. (4 $\times$) にて 1929年 5月26日より

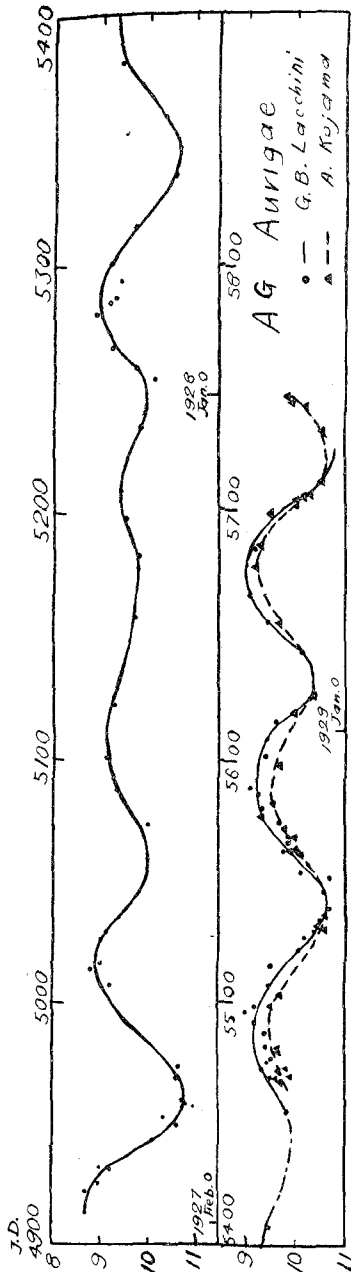
J.D	光度	備 考
242		
5758.1	5.49	
65.1	5.12	
65.2	5.10	
66.2	5.09	薄雲?
70.1	5.03	
71.1	5.04	
72.1	5.04	
73.1	5.03	
79.1	5.09	
79.2	5.05	薄雲?
88.0	5.08	
89.0	5.09	雲?
5803.2	6.09	
05.0	6.10	
07.0	6.10	
11.3	6.15	空少し明るい

7月19日迄の左表の觀測より極大 J. D. 5777 (6月14日) 5.0等級と定めた。

天文年鑑の豫報より後るゝ事11日。

本年はミラは都合が最も悪いが、此の星は觀測し易い夏の空に最高輝に達する。

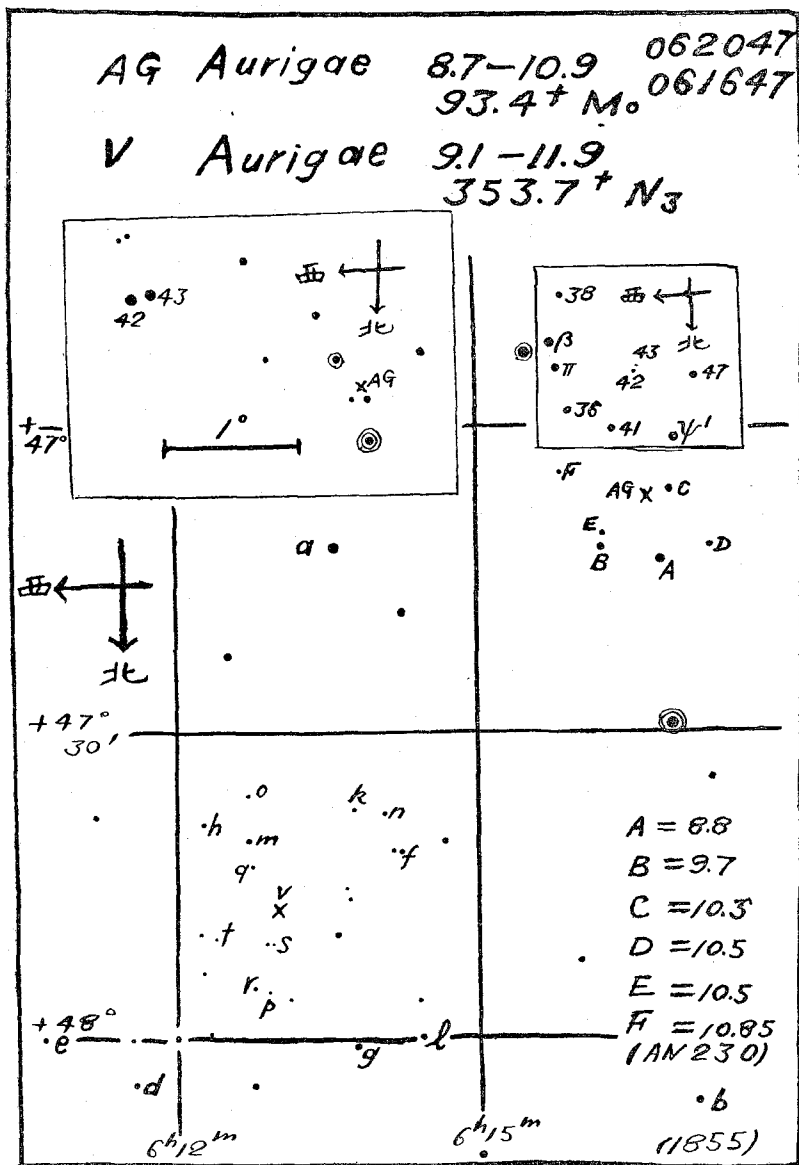
變光星課より



AG Aurigae イタリーの Bemporad が寫眞乾板より發見し1927年2月1日より現在有數の變光星眼視觀測者の G. B. Lacchini が數十日觀測し略百日の週期を有してゐる事を確めた。それで 34. 1927 Aur. なる假の名が與へられてゐたが同年11月9日發行の變光星命名表第24號で AG Aur. と命名された。その後三、四人の眼視觀測や光度計觀測が時々行はれたが、今迄最もよく續いてゐるのはラキニのものである。別圖はその全光度曲線であつて1928年の8月よりの小山の光度曲線と明瞭な系統的差異が認められるが、これは比較星の光度の採り方によるのか、又は兩人の眼の色に對する感じの差によるのだらう。

最近ラキニは BZ 16.(1929)上に1927年2月1日より1929年4月16日迄99個の自分の觀測より普通のミラ型を考へるよりは RV Tauri 型をした方がよいと述べてゐる。愈々以つて興味が湧いて來た譯である。

觀測用星圖も掲げておいた。週期の934日は平均の値にすぎないのであつてその不同は光度曲線を見れば直ぐ解る。分光型は Mo であるがあまり觀測しやすくなく不揃である。併し慣れば目立つ



て揃つて来る。見付けにくいので二つも別に小さな案内図を入れた。

V Aurigae

比較星			
a	8.09	m	11.64
b	9.61	n	11.76
d	9.40	o	12.24
e	9.96	p	12.40
f	10.86	q	12.51
g	10.61	r	12.62
h	10.91	s	12.68
k	11.14	t	12.82
l	11.85	(H.A. 57)	

上の星の近くにあるのでついでに圖を入れた。
比較星の光度は別表の通り、分光型が N_3 であるのが珍しい。併し光が淡いから色は眼に付かぬ。

天文同好會

例會記事

九月例會 豫告の通り去る九月二十二日夕七時から催された。近頃の例會には多く樂友會館を利用したが、近頃天文學教室南館階上の講義室第33號に適當な設備が出来たので、試に此處に開いた。

會する者約五十名で、山本先生の「偉人ハイゲンスの話」を承つた。

今年はハイゲンスの誕生三百年に當つて和蘭では色々な紀念の催ある時我々もかの偉人に就いて聞くのは大いに有意義であつた。(講演要旨は別頁記載)『三百年前の幼稚な科學を今日顧るのは、功利的な考からは一向無意味の様にも思へるが、科學の歴史を知り、それ等の人々の言行から重大な暗示を得ると言ふ點から甚だ重要である』と言ふ前置の下に、偉人ハイゲンスの生立ち、學業、望遠鏡の改良、土星の環に關する發見、時計の研究、測微器の製作、バリー在職中の事績等を詳しく述べられ、彼が第一流の科學者なりし事を結論せられた。

終つて、有志者で茶話會を開いた。大阪其他から色々問題を持つて來られた方があり、暫くそれ等について語り、九時半散會した。